

盆栽の図像学

第九回

歌川豊重《青楼宮中月》

解説／田口文哉

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

歌川豊重《青楼（せいろう）宮中月（ぎゅううちゅうのつき）》
大判錦絵三枚続 左：35.8×26.5cm 中：35.9×26.5cm 右：35.4×26.6cm
文化12年（天保13年）（1815～1842） 版元未詳 さいたま市大宮盆栽美術館蔵

浮世絵師紹介 歌川豊重（うたがわとよしげ）1802～1835？
江戸時代末期の浮世絵師。文政初年（1818年頃）に初代歌川豊国の門に入り、豊重と名乗った。師の没後、家督を相続して、文政8年（1825）に二代豊国を襲名したが、跡目争いや同門の国貞（後の三代豊国）等の勢力におされて作例は少なく、いまだに生没年や業歴等に謎を残す絵師である。



水辺の納涼
うだるような猛暑が続く昨今の夏。亜熱帯のような現代の東京においても、水辺の納涼を求めて隅田川あたりに屋形船で繰り出す遊びが現在に残されている。この連載で取り上げている浮世絵に描かれた江戸時代においても、人々はそうした水辺を渡る風を探し、暑さをしのいできたことだろう。特に隅田川を背景にした納涼図は、美人画の格好の主題となっているのである。今月は、そうした隅田川に面した夏の夜の情景を表した一点。

隅田川沿いにあらわされた吉原遊女

今月の一枚は、歌川豊重による「青楼宮中月」と題された作品を取り上げる。三枚続きのフォーマットに、豪華な飾や何本もの筭（こうがい）を髻に飾った吉原遊女がそれぞれ一名ずつ、背景との高低差から二階と思われる座敷に描かれている。その装束は右から牡丹、胡蝶、撫子と色とりどりの鮮やかな紋様である。右の遊女が団扇をもっていることから、まだ暑い時季なのだろう、それぞれだけだるそうなりラックスしたポーズであらわされている。そして格子の張られた窓際には、夏から秋にかけて花を開く萩が、雲気や唐草、それに花のような飾りが施された大きな素焼きの鉢に植えられ、この座敷に花をそえている。鉢植の萩が描かれた浮世絵は他に例が少なく、貴重な画像資料と言える一点である。萩が秋の季語であることから、季節は晩夏といったところだろう。視線を窓の外に向けると、大きな川に舟遊びをする最中の屋根船が数艘あらわされ、対岸の空には満月がはっきりと浮かんでいる。その満月のすぐ下に、対岸の堤に隠れるようにして鳥居の上部だけがのぞいているのがわかるだろう。この特徴的な鳥居のあらわされ方は、いわば江戸の観光スポットとして著名な、隅田川の浅草対岸に位置した三囲（みめぐり）神社の典型的な描き方、誰もが共有した三囲神社のアイコンと言えるものなのである。

ここで一つの疑問が浮かび上がってくる。題名の「青楼」は官許の遊里である吉原を指す言葉として通用し、筭を数多くつけた女の姿は吉原遊女独特の装いである。その吉原は、浅草寺北側に位置する周囲を田んぼに囲まれた場所に営まれたのであり、本図にあらわされた隅田川東岸の三囲神社の鳥居は、吉原からは見えるはずのない光景なのである。いったい、本図ではどうしてこのようなことが起きているのだろうか。

吉原遊郭の焼失と仮宅（かりたく）

吉原の遊女は廓外への外出を固く禁止されていた、いわゆる「籠の鳥」である。その遊女に、限定的ではあるが吉原以外でまみえることができた独特の営業方法があった。火事による遊郭の焼失がその原因で、二百日あるいは三百日など営業したかわかってくるのである。

と期日を限定して、浅草近隣の料理茶屋などを借りきって期間限定の臨時営業をしたのである。夜間を通して火を使う吉原では江戸時代を通じて何十回と遊郭が全焼し、「仮宅」と呼ばれたこの営業方法は、その都度行なわれていた。吉原遊びは格式が高く費用がかさむのが通例だが、仮宅ではずっと安易に遊べることから庶民に人気が高く、また楼主にとっても多くの客が来ることから儲けが多く、火事すらも歓迎されていたと言われている。絵に戻ってみれば、リラックスしたような印象を受けた花魁のポーズも仮宅ならではの落ち着いた様子と解釈できるだろう。また画面の右端に表された梅の屏風は、料理屋の大広間を営業用に区分する間仕切りとして使用されていたと考えられる。そして特にこの絵の場合、絵師豊重の画歴と描かれた場所から参照して、いつ起きた火事による仮宅であるか、そしてどのあたりに仮宅を営業したかわかってくるのである。

絵と資料から探る制作年と仮宅の地名

本図の絵師歌川豊重は、文政6年（1823）頃から現存例に名が見つかり、同8年（1825）には二代歌川豊国の名を襲名している。本図は豊重名のある数少ない作のうちの一つである。そして、このおよそ三年の間に起きた吉原での火事は一度のみ確認できる。江戸時代に起きた広範な出来事を編年により記述した斉藤月琴『武江年表』には、文政7年（1824）の項に以下のよう記されている。

四月三日、暮六時、吉原京町二丁目より出火、廓中焼亡（仮宅は花川戸町、山の宿、瓦丁、深川、大新地、小新地、仲町、表橋、裏やぐら、裾つき等なり）。*引用は金子光春（校訂）『増訂武江年表2』東洋文庫より。

4月に廓が全焼した旨を伝え、仮宅の場所を10箇所ほどあげているのであるが、豊重の画歴とこの時期の吉原全焼の記事を比べると、この4月の火事によって営まれた仮宅、すなわち文政7年（1824）の夏が本図の制作時期と推定されるのである。そして、『武江年表』に載る10箇所あげられた仮宅の地名と、本図の背景に描かれた三囲神社の対岸に位置する町名を古地図によって比較すると、待乳山聖天の麓にあった「瓦町（丁）」あたりがこの仮宅のあった地名だとわかるのである。

期せずして4月号の本連載に取り上げた、明治の絵師楊洲周延による名所の渡し舟を描いた図の対岸から見た情景を、本作はあり続け、盆栽も二つの時代の生活を変わず彩っている。今月は絵のなかの図像をヒントに、これまで明らかにされてこなかったこの図の制作年と描かれた場所を特定することができたのである。（続）

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知

■夏の風景 一水石と染付盆器一

概要：夏の風景をテーマに、当館所蔵品から水石や染付盆器を出展し、涼やかさを演出します。また、朝顔の鉢植が描かれた浮世絵版画も展示いたします。

会期：7月22日(金)～8月31日(水) (毎週木曜休館)

■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091

著者プロフィール

田口文哉（たぐち・ふみや）

さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。

1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。